

第15回館長講座 『第2の道具 土偶をめぐって(2)』

館長：みなさん、こんにちは。今日は、今年最後というだけではなくて、今年度最後となりました。長い間お付き合いくださいまして、ありがとうございます。

前回も土偶の話をしました。土偶というのは色々あって1回では終わらず、今回へ持ち越しました。

土偶の研究というのは、色々な観点からされるわけですが、やはり考古学の資料ですので、遺跡に戻り、遺跡での出土状況を見ながら行うということが、研究のとりかかりだろうと思いますので、まず、いくつかの土偶の出土状態を見てみようと思います。

前回も触れましたが、遺物の出土状態から遺物の性格を考えようとしたのが、八幡一郎先生です。研究史を振り返ってみても、色々な研究者たちが様々な見解を述べているわけで、それが現在でも続いているわけです。先程も言いましたが、考古学という学問の中で取り上げられる、そして、また考察される対象であるには、芸術性や呪術性とかを云々する前に、遺跡の中での在り方、或いは特殊な遺構の中から出て来るなどという考古学の常道に立ち返って論ずることがなされるべきだと思います。そこで、遺跡の中でどういう状況で出土するのか、そこから考察していこうと思います。

いくつかのパターンがあると思いますが、次に挙げるように、4つのパターンについて、見ていきたいと思います。

- (1) 特に遺構と言われる、穴の中、墓、住居跡などの中から出てくるわけではないが、遺跡の中で集中的に出土する地点があるという例
- (2) 遺跡の中で散在的に出土
- (3) 何らかの遺構に伴って出土
- (4) 明らかにお墓に関連して出土

と分けてみていきます。この(3)と(4)に関しては、これは縄紋時代の人々の宗教的な思い、或いは呪術的な意思を反映した結果によるものでしょう。

(1)と(2)については、土器片と同じような出土状況を見せるということになるかと思います。

まず(1)の「遺構はないが、遺跡の中で集中して出土する」例を挙げます。

千葉県市原市にある西広貝塚、ここは、私が、初めて、まともに「貝塚」というのを調査した所です。この貝塚自体は縄紋時代中期の後半から縄紋時代が終わる頃まで、その後は弥生時代の住居跡もあります。特に晩期の半ば頃を中心として、遺物の集中地点、土器やシカやイノシシが焼かれた骨が集中して出て来る地点がありました。それらと一緒にその当時で140点の土偶が出土しました。1972年の発掘当時、この頃においては1つの遺跡から140点も出土するというのは、ほとんど例がないということでした。一緒に発掘をしていました米田耕之助さんという方が大部分を図化しました。これは、アットランダムに並べてあるので、上下逆さまになっているものもありますし、それから、時期を考えずにまちまちであります(笑)。あとで話が出てきますが、このへんは後期のもので、これらも後期の山形土偶というものです。それから、このなかで一番傑作だと思ったのが、この土偶です。これは、発掘して、洗って、図化した後、我々は秘かに「団十郎」と呼んでいました。本当に隈取りをしたように精悍な顔を

していました。このように、眉があつて、頬に入れ墨があつて、というものです。時期的には、色々あるというのは、この顔は縄紋時代の最後の荒海式の土器と同じ模様が付いています。これは、入れ墨ではなく、土器の模様と同じなのです。このへんの所は、晩期の前半のもので、接合した例というのは、ほとんどありませんが、ひとつだけ、これが、この上の方と下の方とくっ付いています。これも晩期の半ばくらいのもので、こういう宇宙人のような顔をしたものとかミミズク土偶の顔の周りがなくなってしまったものとかです。これは口の周りに泥棒の顔のような模様をしています。これは、おそらく晩期の前浦式という土偶です。それから、これなんかもありますし、こういったところにもよくありますが、アルファベットの「I (アイ)」の形の彫り込みがあります。これは三角形を上と下から繋げていて、間が伸びたものだと思います。これはI字紋という名前を付けて、この土偶や動物形土製品といったような祭祀用というか、呪術的のような遺物に付けられる顕著な紋様要素だと指摘したことがあります。

岩手県の立石遺跡では、218点、200個体分出土しています。

そして、土偶というと、何と言っても山梨県の釈迦堂遺跡です。これは、東京から長野に行く中央自動車道の山梨県内に釈迦堂パーキングエリアがありますが、そのパーキングエリアを造る時に見つかった遺跡です。これは広い村の遺跡です。調査中にも600点を越す数が確認されていて、その後、出土した遺物を洗って整理してみている中で、最終的に1,116点という大量の土偶が見つかっています。1つの集落で400点を越える所もあります。釈迦堂の土偶も本に載っているわけですが、これらの顔に見られる通り、ほとんどが中期の土偶です。この釈迦堂遺跡はパーキングエリアを造ることで調査され、その後どうなったかと言いますと、もちろんパーキングエリアを造ったので遺跡そのものは、もうありません。その代わりに、パーキングエリアのすぐ側の上の丘に釈迦堂遺跡博物館という土偶を専ら扱う博物館が存在しています。しかし、遺物だけ残っても、ここで、こんなに土偶が出たという示す場所があつても、肝心な元々の場所がなくなっているというのは、とても悲しいなという思いを持ちます。

次に(2)の「遺跡の中で散在的に出土する」遺跡の例は、数が多いです。

まずは、山梨県の金生遺跡です。この遺跡のある大泉村は、現在は町村合併で北杜市大泉町です。後期・晩期の遺跡で晩期を中心にする遺跡です。非常に多くの石組遺構があります。これはこの金生遺跡から出土した土偶、土偶という扱いをして良いのか、確かに目のようなものがあり、口があつて、足があつてと人のような形をしています。しかし、本当は土偶というよりは、土偶形容器という言い方をした方が良いのではないかなと思います。この模様からすると、晩期半ばくらいのものだと分かります。これは口が尖っているものですから、金生で出土したタコと呼んでいました(笑)。このようにあだ名が付けられる遺物は、それなりに幸せなのかなという思いを持ちます。

それから、茨城県の霞ヶ浦の南にある立木貝塚、千葉県佐倉市にあります吉見台遺跡があります。立木貝塚も吉見台遺跡も後期・晩期の遺跡です。

岩手県小田(こだ)遺跡では、一部が調査されただけでもかかわらず、土偶が130個体出ています。そのうち五体満足な土偶は、僅か1個しかなく、他はことごとく手や足、頭、または胴体のみというように、細かく壊されて破棄されたという解釈がされています。破片どうしくっ付いたものも4個体だけです。まあ、土偶の普通の出土の仕方です。

次に (3) の「何らかの遺構に伴って出土する」例です。これは結構種類があります。

まず、石囲い遺構中の出土について紹介します。これは先程も紹介した八幡先生が最初に取り上げた所で、「その土偶が発見された際その周囲に小石が直径 1 尺 2・3 寸くらいの円形を持って取り囲んでいた」。おそらく土偶の出土状況に注意をして報告された最初の例だと思います。この土偶自体は中期の土偶です。頭がきちんとしていて、下半身はありませんが、手を広げた中期の土偶です。

ここから非常に著名なものが出てきます。群馬県の郷原遺跡のハート形土偶です。1964 年の東京オリンピックの時のシンボリックな土偶でした。あの頃、オリンピックでは運動競技だけではなくて、文化的な展示というのもされ、東京国立博物館で日本古美術展が開かれました。その時にメインとして展示された土偶です。土偶が発見された石囲いそのものは破壊されていましたが、近くから同じような遺構が出て来たので、このハート形土偶の出土状況というのが推測でき、復元できたということです。

このような石囲いです。9 つの石で四角く囲っています。長い方が 60 cm、短い方が 40 cm、深さも 40 cm というくらいの所に納められていました。石は安山岩だそうです。しかも板石で蓋がしてあったそうです。底石、一番底の石は、なかったということです。向きは南北です。これを見ると、石で囲った棺に葬られた土偶という感じですね。

それから、岩手県の立石遺跡では、楕円形の石囲いの隅、ここの所です、ここに土偶の頭が出土しています。こちらが南北で、長軸方向が 42 cm、短軸方向が 30 cm で、住居の炉の跡、炉の石組のような形をしています。しかし、ここについては火を受けた痕はないので、形は炉のようですが、炉ではなかったであろうということです。この石組の下に花崗岩の平たい石が置かれています。この石の下には 33 cm × 17 cm の範囲で焼土の堆積が見られました。ここから土偶の頭だけが見つかったということです。どういう意味を持つ石組なのか、にわかには判断できませんが、明らかに石組の中に置かれた形で頭だけがありました。

それから山梨県の中谷遺跡です。この遺跡は配石遺構があります。その中の 1 つから、この土偶が出て来ています。この顔はミミズクのような形をしています。一緒に出土した土器などを見ると、晩期の前半から半ばにかけての土偶だということです。表土の下だいたい 50 cm ~ 70 cm の所に、このような石が置かれていました。10 cm ~ 20 cm の大きな石が並べられていました。ここが開いていて、このように囲われています。この石組の中央部から顔面を上にしてやや斜めの状態で、両手は欠けていますが、顔もだいぶ欠けていますが、土偶が出土しています。これも石組の中に納められていた土偶です。

次は、宮城県の里浜貝塚です。これは昭和 18 年頃の発見です。杭打ちの作業中に、杭が深く打ち込めない所があったので、どうしてだろうと、その場所を掘り起こしたところ、このような状況だったということです。地面から下 30 ~ 35 cm くらいの所に扁平な川原石が平らに置かれていて、これを取り除くと、この扁平な石の下に仰臥の姿勢で小土偶、晩期初頭の大洞 B 式土器に伴うものが置かれていました。右足が折損していたということです。これも石の中に納めて蓋をするという形です。

これは、岩手県の雨滝遺跡です。東北大学におられました芹澤長介さんが、昭和 33 年に、この遺跡を

調査し、その時に幾つか土偶が出土しています。その中に、特に、このようなものがありました。だいたい4~5 cmくらいの大きさの礫が並んでいて、その上に平たい石が置かれていました。この石をどかしたところ、中から土偶が出て来たということです。胴部以下、下半身が欠けた土偶が一個、上を向いて納められていました。晩期前半の土偶です。おそらく、こちらにも石があったのかもしれませんが、この雨滝遺跡の報告を記した中で、時々「土偶キラー」という言葉が出てきます。発掘をしていて、土偶を壊してしまった、学生が掘っていたものですから、まあ、土偶キラーがいて困ったみたいなことが書かれていました。これはどうなのかは分かりませんが、発掘をしていて、つい手が滑ってしまうことは、よくあることです。別に「キラー」＝「殺人者」ということではないと思います。これも、石の囲われた中に蓋をして、置かれていたという事例です。

これは晩期の後半の土偶で、山形県杉沢遺跡のもので、これは昭和28年に家を建てる時に見つかったものです。これも蓋石のある石囲いの中から出土した例です。発見者が語ったところによると、北と東西方向に20 cm位の川原石を置いて、その上に、平たい、ここの石が被っていたそうです。頭を北にして、やはり仰臥した状態で置かれていて、蓋石で覆われていたという状態だったそうです。地表面から深さ60 cm位の所で見つかったということです。これを見ると、この土偶は埋葬されたのかなという感じを持ってしまいますが、そう簡単にも言えません。難しい所ですが。このように石囲いの中からちょうど埋葬されたかのように思わせる状況で、見つかったものがありました。

ここまでは「石」で囲われていましたが、「土器片」で囲われた中から出土する例がいくつかあります。

これは、新潟県長岡市板倉遺跡の1号住居址で見つかったものです。この板倉遺跡からは23点の土偶が出ています。みんな中期の土偶です。特に第1号住居址から出土したものは、後でもう一つ別な例が出てきますが注目されます。住居址自体は、卵形で、そのピット、穴からも出てきます。P3と番号を付けられた深い穴の上の方に土偶がありました。土偶があったというよりも、木炭片が混在した黒褐色の腐食土が充填しており、この腐食土は、住居の床から5 cmくらい盛り上がって、マウンドを成していたということです。その中に、これが納められていました。土器片が周りを囲っていて、こちらが頭になるので、逆さまにして入っていました。このピットの口が25 cm程、深さが51 cmでした。垂直に倒立して埋められていたということでした。その周りに、このような土器片が周りを囲うようにしてあったということです。

同じように、土器片で囲われていた著名な例が、千葉県の加曽利貝塚です。この土偶の頭が土器片で囲われた、壁を支えたと言っているような形のピットの中に納められていました。土器の破片を丸く廻らせていて、中央より、やや北側に寄った所に、顔を南に向けた土偶の頭部が出て来ています。この穴自体は、長径43 cm、短径35 cmの割と大きめの穴です。下に行くほど窄まり、ちょうど1つの土器のようです。ただ、この図面でも分かる通り、土器を埋めたのではなく、土器片を埋めているのです。

しかも、この土器片、これも見て分かる通りみんなこのように反っています。つまり、普通は外側になる方が内側を向いています。全部の破片が、土器自体の外側の面を、内側にして置かれていたということです。これが何を意味しているのかは分かりません。この土器自体は2個体分あり、これを図化したものがこちらです。これは、甕形で、こちらは鉢形です。不思議なのは、この土器自体は後期前半の

堀之内式という時期の土器ですが、この土偶は後期半ばの山形土偶に近い形です。つまり、この土偶の時期と土器の時期がずれているという見解を持たざるを得ないのです。どういうことなのか、色々な解釈が出来そうです。

それから、祭壇上の高まりがあつたり、石の上に置かれていたりするものがあります。これは、先程出てきました、長岡市栃倉遺跡の1号住居址です。これが1号住居址で、先程のピットの土器の囲いの中から出て来たというのは、ここ、P3です。ここから出て来たのです。今、取り上げるのはここです。このように頭がなく、下半身もなく、手は完形の土偶がこの平たい石の上に頭を西にして置かれていました。この石が赤く塗られた所があり、また土偶の背中部分に当たる所、少し見えにくいかもしれませんが、ちょっと窪んでいます。このような小さな窪みがあつたということは、何か思わしげな感じがします。現在の國學院大学の博物館で、火炎土器の展覧会を行っています。その展覧会の中に、ちょうどこれが展示されています。栃倉遺跡という所から火炎土器が出ていて、國學院大学にその資料が収蔵されていたということで展示されています。

この石と土偶も展示されていました。出土状況を復元して展示されていました。これは何でしょう。想像をたくましくすると、住居の一角に、祭壇を作って置いたというようなことも考えられるのかなと思います。

同じような出土状況をしたのが、この国宝の合掌土偶、手を合わせてしゃがんでいる土偶です。これは土偶の人気投票で何年か続けて第1位をとっています。イギリスにも行きました。後期後半の土偶です。岩手県の風張1遺跡の住居址から出土しています。このような竪穴住居跡で、ここが出入り口になります。真ん中に炉があつて、出入り口のちょうど反対側の少し高くなつた所に横たわっていました。出入り口から向かって奥の北壁際に、右側面を下にして正面が住居の中央に向いていて、背中が壁にもたれかかるようにして出土したということです。これで見ても分かる通り、左足がありません。欠けています。でも、この左足は、2.5m離れた西側の床面から出てきました。それを接合して、現在このような形に戻されています。

1つ前に挙げた栃倉もそうですが、住居の中から、住居の片隅に置かれた形で出土したという例は、非常に少ないのです。この風張1遺跡から7点ほど土偶が出ていますが、形が完全に復元できたのは、この1個だけです。座っていて、手を前にこのように合わせていて、指を組んでポーズをとっているのが、合掌土偶という愛称があります。この土偶は、もう一つ特筆することがあり、先程左足が割れて出て来たと言いましたが、この割れた部分にアスファルトが付いていました。アスファルトは接着剤として使いますので、割れても、壊れても直して使っていたということなのです。一部赤色の顔料が認められますので、実際に使われていた時には、全体が赤かったのではないかと推定されます。

次は、ピットから出土した例です。

これは、土偶の中での国宝となった第一号の、縄紋のビーナスというあだ名が付けられている土偶です。長野県の棚畑遺跡で昭和61年に発掘されました。この遺跡からは膨大な量の遺構や遺物が出土していて、この図を見て分かる通り住居址だけでも150軒以上、完全に復元された土器が600点にもな

る大きな遺跡です。この土偶は、住居址群、集落とって良いのでしょうか、の中央の広場の真ん中辺り、赤い所から出土しています。第 500 号土坑から寝かせて安置したような状態で出土しました。これもこちらの足が欠けていますが、一緒に出て来てくっ付けて修復しています。この出土状況からは、壊す意図というものが感じられません。土偶というものは、壊れる・壊されるものだという考えがあると前回紹介しましたが、そのような兆候は、どうもないようです。頭がだいぶ装飾されていますが、横から見ると、お尻が出っ張って安定感のある中期の典型的な土偶です。

それから、ピットから出土したもので、写真がぼやけていて恐縮ですが、先程紹介した釈迦堂遺跡から、このようなピットの中から、土偶の下半身だけ、直径 30 cm くらいの穴の中から出て来ています。先程、釈迦堂遺跡では、色々な所から出土すると紹介しましたが、中には、このように丁寧に埋められたのではないかと見られる出土例もあります。

今のように、棚畑にしても、釈迦堂にしても、穴、ピットからの出土を見てきましたが、その穴、ピットの性格は明らかではありません。おそらくお墓であろうと考えられる遺構から出土したものもあります。これは国宝です。国宝仮面の女神です。国宝の土偶は 5 点ありますが、これで 3 点出てきました。合掌土偶と縄紋のビーナスと仮面の女神です。

長野県茅野市中ツ原遺跡から、仮面の女神が出土しています。これは、全身がほぼ完存する大型土偶です。高さ 34 cm、重量は 2.7 kg あります。仮面を付けているような姿を思わせる形であることから仮面の女神と言われていています。この土偶は後期前半の土偶です。

これは遺跡のほぼ中央にお墓と考えられる穴が密集する場所で、穴の中に横たわるように埋められた状態でした。これも、右足が壊れていて、胴体から外れていましたが、この土偶の場合は、人為的に取り外したということが明らかになりました。お墓と考えられるピットということで、副葬された物なのか、この土偶だけ単独で埋められていたのかについては、議論の余地があるようです。

それから 4 つ目の国宝です。函館市著保内野、ここは、今は函館市ですが、南茅部町という所でした。ここから出土した土偶は、最大の中空土偶です。遺跡は、畑・山林だった所で、土偶の出土地点は馬鈴薯畑でした。ジャガイモの収穫時に偶然発見されたもので、当時の南茅部町教育委員会が緊急の発掘調査をしました。これは発見された所を含む写真ですが、この中で最終的に 2.5m×1.8m の区画を調査しました。お墓と考えられる遺構は、5 つほど出て、土偶が出土したと思われる所の真下に、このような穴がありました。緊急調査した中では、この土坑が最大であったということでした。長軸 1.7m、短軸 0.6 m のものでした。この土坑の中から、微量ですが骨が見つかっています。この微細骨を北海道大学の先生に見てもらったところ、人骨の可能性が強いということだったようです。そうだとすればお墓と一緒に置かれていた土偶と言えるようです。

発見された時の状況は、土偶の背中に鍬の痕が付いているので、下向きに置かれていたのではないかとということでした。これは、発見当時は欠けたところがありましたが、修復をした結果、このようになっていきます。口の周りにたくさんの凹凸があります。しかも、そこが黒くなっていました。黒いというのは、アスファルトなどが含まれていたのです。それで、この土偶は男ではないかと言われたこともありますが、やはり胸の表現もあり、身体の膨らみも見て女性だろうと。

では、当時の女の人には髻があったのかと、怖いですが（笑）。やはり、他の土偶をみても、顔の口の周りに装飾があったり、入れ墨があったりということで、当時の風習として入れ墨を考えても良いのではないかと。これを函館市の病院に持ち込みましたが一度は断られたそうです。CTは人に使うもので、これは人ではないからと（笑）。そのように断られましたが、色々と交渉して、結局そこでCTスキャンにかけました。そして、中がどのようなになっているのかを見て確かに中空だと確認しました。それから、作られ方、粘土の組み合わせ方などの調査がされています。

北海道が続きますが、これは北海道洞爺湖町にある高砂貝塚の出土土偶です。この高砂貝塚も、配石遺構で、石組のある遺跡です。この石組の中に、土偶が1個あり、現在は、入江・高砂貝塚館に展示されています。この出土状況ですが、図がぼやけていて恐縮ですが、このように周りが石で覆われていて、中にピットがあり、そのピットの底に土器が納められています。ここに3つ入っています。その途中で土偶がありました。土偶自体は、このようなものでした。これは、晩期の前半くらいのものでした。この穴は、口径が約35cm、深さ約25cmでした。土偶自体は、左腕が欠けていて、穴の上の方に納められていました。深さが約5cmの所にありました。頭が北になっていて、下を向いて置かれていました。

それから、同じ北海道の千歳市、新千歳空港の建設に伴って調査された美々4遺跡の土偶です。昭和58年の発掘調査で出たもので、晩期の初めくらいの墓地遺跡です。その墓穴の1つから土偶が出て来ています。ここは、人骨が残っていませんが、穴の底が赤くなっていて、おそらく遺体にふりかけたのであろう赤い顔料が残っていました。この土偶は、赤い顔料の下から見つかっています。おそらく遺体のすぐ側に置かれていたのだらうと考えられます。ほぼ完形のものでした。乳房があり、下腹部が膨らんでいるので妊娠している様子です。他に、この墓から巻き貝の形をした土器とか石皿などが出てきました。女性の持ち物らしい遺物が出ていたので、女性のお墓ではないかと推測されています。他にも副葬されているものから、女性だらうと考えられるお墓の穴はいくつもありますが、この穴からだけ、土偶が出土したということです。このことは、「このお墓に納められた人は、どのような人なのだろう。」と考えさせる材料になります。この土偶も、うつぶせの形で出土しています。人を埋葬する時に、顔を上にするのか、下にするのかということもあるかと思いますが、この土偶が、このお墓に埋葬された人と同じ姿勢をとって葬られたのだとすれば、このお墓でも、顔を下にして、背中を上にして葬られたのではないかと考えられるようです。普通はそのような形では葬りません。顔を上に向けて埋葬するのが普通だと思いますが、だとすると何か特別な死に方、または何か特別な役割を果たしていた人ということなのか、お墓の生活そのものを考えさせられるものになります。

次の北海道江別市の大麻3遺跡もお墓です。この土偶もほぼ完形です。これは2体が重なり合って出土しています。こちらの大きい土偶が下で、こちらの小さい土偶が上になっていました。背中合わせの形で、この大きな土偶は顔が下を向いていて、小さな土偶は顔が上を向いているという状況で出土しています。おそらく、この土偶は土壌の縁に立てられていたのであろうと考えられています。それが土壌の方に向かって倒れたという出土状況です。これはお墓の中に一緒に埋葬されたものではなくて、お墓を祀る・祈る形の置かれ方をしていたのであろうと考えられています。

主な出土状況としては、以上です。これらから、何が考えられるのかということですが、ここから、

先は難しく、触れませんが、このような出土状況から、土偶の生活を考えるということになります。

この土偶は、遮光器土偶の一種ですが、青森県の宇鉄遺跡から出土した土偶で、この土偶の出土の仕方がよく話題になります。この土偶、小さい土偶は、こちらの大きな土偶の中に入っていたのです。これは中空土偶です。奈良大学の学長をされていた水野正好さんはこれを『蘇る土偶』と呼んで、見解を示しています。「大きな土偶である。死して葬られていくだけではなく、珍しくも蘇りをも表現した土偶である。頭部が壊れていたが、その破片と共に今1点の小さな土偶が腹の中に収められていたという。母なる土偶と異なる土偶で子どもとなる土偶であり、また女から女への世継ぎである。形の違いは年代の違いにもなり、旧から新への世継ぎでもある。子たる土偶の出現が願われていたであろう。」というものです。土偶の役割、当時の人の土偶への考え方、これを伺わせるものとよく言われるところです。パンツを履いているように腰の所に装飾がありますが、これで縄紋時代の人がパンツを履いていたとすぐに連想してはいけません。その可能性はありますが、そうだとは言えません。

では、土偶の出土状況から、ほかに分かることがないだろうかということで見えていきます。前にも話題にしましたが、出産の形があります。男性土偶と考えられていたものが、そうではなくて、股間から出ているものが男性のシンボルではなくて、子どもが出て来る時の様子だろうということで、当時の出産の様子的一端がこれで分かります。土偶は人の形を模したものですから、髪型・身体装飾、土偶そのものの形から、座る生活・日常生活・使用していた物・衣服などを見てみます。

まず髪型を見てみます。ここに挙げたのは木菟土偶です。これは、後期後半から晩期初めくらいの土偶で、頭の所だけ出しました。この土偶から、このような髪型が絵に描かれています。これには相当抵抗がありますが（笑）。サザエさんの頭を考えているのでしょうか（笑）。これをモデルにしてこのような絵が描かれて子ども向けの物に載っていたりします。

土偶の頭の変化を集めた写真があります。写真家の小川忠博さんが『縄文美術館』という本を出していますが、その中で土偶の頭の部分だけ変わったものを、たくさん採り上げています。顔を見ると、本当に縄紋時代の人なのかと思うようなものもありますが。髪の毛を結んでいるというのは、いくつも事例はあります。これは帽子を被っているように見えますが、帽子だと思わなくていいようです。

髪の毛は、何らかの形でまとめていたのだらうと思います。上の3つは、当館の展示室の中にいる女性たちです。先程も確認しに行きましたら、もう一人いました（笑）。これは竪穴住居にいる女の子ですが、この子の横におばあさんが座っています。このおばあさんを外してしまいました（笑）。これはジオラマの中で木の実を採って帰ってきたお母さんで、この方は頭の上にお団子をつくっています。縄紋時代の装身具を付けて座っているこの人は頭の上にお団子を作ってピンで留めています。この子はウサギの耳のように留めています。一人外してしまったおばあさんはどのような髪型かということ、おばあさんはチョンマゲでした。よろしかったら、後でご覧になってください。

こちらの方が、実は生の様子を表しているのではないかと私は考えます。これは後期半ばの山形土偶と呼ばれる部類のものです。この後頭部に盛り上がりがあります。これもそうです。髪を丸めていると

いう程度の扱いはしていたのだろうと。

それから耳飾りですが、土偶で装着方法が分かります。これは縄紋時代の晩期のものです。先程も出てきましたが、これは木菟土偶の仲間です。これは同じ土偶の顔の前と後ろです。この耳の所を見ると、同じ所に円い形があります。おそらく、耳たぶに穴を開けて貫通させて耳輪をはめる、ということが土偶にも見られる例です。山形土偶にもあります。この土偶の、これは前と後ろですが、これも耳の所に同じような細工が見られます。こちらも、やはり山形土偶ですが、こことここにあります。耳飾りの装着は今で言う、ピアスです。大きいものだと5cmくらいありますから、ビヨーンとぶら下げているのだと思います。この人も付けています。

それから、実際の生活のあれこれ、しゃがんで生活をするということが割りとは日常的な生活だったようです。これは手を組んでいて拝んでいるような姿とも言われますが、一般的に、蹲踞土偶、座っている土偶です。解釈としては、祈りのポーズを示しているということだとも考えられます。それから、この土偶は同じものですが、長野県尖石遺跡から出た中期の土偶です。

これは、後期後半、これも後期後半ですが、これもしゃがんでいます。このように、しゃがんで休息をしたり、仕事をしていたりという様子は、土偶からだけではなく、貝塚から発見される人骨からも、それが日常のポーズであったらという見受けられます。縄紋人の踵の骨や膝の骨の所に磨り減ったというか、蹲踞面と呼ばれる一種の変異があります。これは、足の関節が、習慣的に強く曲げられていたことによって生じる関節面の変異なのです。踵の骨の関節面の変異が、縄紋の人骨に非常に多く見られます。縄紋人における、この蹲踞面の出現頻度というのが今日の世界各民族の中で高い、蹲踞面が発達している、つまり、しゃがんで生活をする日常生活を送っているということが分かっている人達、インドの人達、オーストラリアの原住民などに匹敵するほどなのです。しゃがんで作業をするというのは、実際にやってみて、こういう座り方です。下品な言い方はしませんが(笑)、こういう座り方が日常的生活スタイルだったのではないかとということが土偶から言えるわけです。

これも、有名な土偶で、おんぶしているものです。石川県の上山田遺跡から出土したものです。人には見えないような装飾ですが、足の部分を見ると、指の表現までしてあります。お母さんが背中に手を回して子どもを支えている様子です。

これは、東京の八王子市の宮田遺跡のもので、ちょうどお乳をあげている時の様子です。お母さんが横座りになって、足の裏がこちらです。この上に子どもを乗せています。この子の目の方向を見ますと、おそらく、お母さんと、じっと見合っているのだと思わせるような方向です。このお母さんは頭がないのですが、佐倉市の国立歴史民俗博物館でためしに復元して作ってみましたが、何とも間抜けなものになってしまい、やっぱり、これはこれで良い、かえって顔がない方が我々の思いを増幅させるところがあるのかなと思います。ちなみに、この子はお乳をくわえていないので、お母さんのおっぱいがちゃんと表現がされています。

こちらの土偶は目切遺跡のもので、土器を横に抱えて立っている様子です。先程の蹲踞しているこの土偶も、やはり土器を抱えています。それほど、大きな土器ではない時には、このようにして土器を運ぶのだという様子です。

さて、先程の国宝にもありました仮面土偶です。こちらは、先程紹介しました写真家の小川忠博さんが撮影した仮面の土偶です。この2つの写真を見ると、両方とも、お面を付けているというのが分かります。お面を付けて何をしたのでしょうか。これは先の話題になると思いますが、こういうお面を付けて、何かをしていたのです。これも、髪型は、丸めて上で束ねていたり、上でつまんでいたりしている髪型です。仮面を付けた祭りか何かがあったのだと思います。

次に、衣服ですが、これも重要文化財になっている青森県亀ヶ岡遺跡の遮光器土偶です。この土偶から衣服を復元するということがよくされていて、このような絵にも描かれています。他に、衣服・衣装・模様などを考えさせる材料がないので、土偶から想像するのは勝手だ、と私は正直好きではありませんが。というのは、土偶の胴体の模様ですが、これは土偶特有のものではなくて、土器に施されるものと同じ系統の模様なのです。逆に、土偶の体部に付けられた模様から、土器の模様と照らし合わせて、この土偶がいつ頃の物なのか判断されます。

佐原真さんは、もし土偶に付けられている模様が、衣服の模様だとすると「よく似た擦り消し縄紋や刺突紋を飾ったイノシシ土偶やサル土偶など野性の動物たちも衣服を着けていたことになってしまう」という指摘をしています。具体的には、どういうものなのかというと、これです。十腰内遺跡のイノシシの土偶で、確かに、この土偶の模様は土器の模様と同じです。これは、晩期前半の模様の付いたものです。これは千葉県市原市の上子遺跡から出て来たイノシシ形土偶です。これはアルファベットのIの形の模様が付けられています。胴体の模様は、模様で、無理に衣服と関連させて考えなくて良いと思いますが、手掛かりにするくらいなのかと思います。実際に、博物館の体験コーナーには、縄紋時代の衣装が置いてありますが、こちら側が仙台市縄文の森広場のコーナーのもので、頭からすっぽりと被る形のもので。この模様は土偶の體の模様がヒントになっています。こちらは岩手県の御所野遺跡の博物館のもので。やはり、このような模様です。土偶からヒントを得た模様が付いています。

この絵を最初に見せられた時はショックでした。朝日新聞社から出された週刊朝日百科というシリーズの中の1冊に載りましたが、岩手県萩内遺跡から出土した土偶の頭です。頭だけですが、人と同じ顔くらいの大きさです。ここにあるような模様があります。この模様も土偶の入れ墨模様だけではなくて、土器にあっても、おかしくはありません。顔面に付けられたものを入れ墨にしてみたものです。この人の歯ですが、縄紋時代の人の習慣で抜歯があります。成人儀礼だという人もいます。わざわざ歯を抜く習慣があります。

それから、上の歯に刻みを入れる叉状研歯も見られます。叉状研歯で抜歯して、入れ墨をしている、縄紋時代の人、こんなにも恐ろしげな顔をしていたのかなど、もう少し目は大きくても良いと思うのですが。あくまでも、想像で、このような絵もありますということです。

総まとめ的なものになりますが、土偶の変遷を見ていこうと思います。

一番古い時代の草創期の頃から土偶はあります。この表で見ると、西日本の方には、あまり土偶はありませんでした。後期になると、土偶は日本中に広がります。この頃は、土器も北から南まで同じよう

な系統のものになってきます。地域性というものが、一旦、あまり無くなります。その中に、土偶も入ってくるのかなと思います。土偶自体の呼び方は、色々であり、これは永峰さんという國學院大学の先生が作られた図で、古いタイプのものですが、板状土偶、立体土偶、これは十字形になっている立像形土偶、それからハート形土偶、これは徳利みたいな形で頭がちょこんとついている筒型土偶、山形土偶、ミミズク土偶、有髯土偶は、ひげがたくさんあるものです。先程の風張遺跡の国宝の土偶もあえて言うと、こういうところなのかなと。それから遮光器土偶、中空で中に骨が入っていたような容器形土偶です。

一番古い段階、草創期のもの、これは、ここ数年よく見つかるようになって来ています。これは三重県松阪市粥見井尻遺跡のもので、完形です。長さ 6.8 cmで、そんなに大きなものではありません。これは、滋賀県東近江市の相谷熊原遺跡のもので、これは小さくて 3.1 cmです。非常にふくよかな身体をしているものです。これは成田空港の所から出てきました、千葉県の本木根遺跡の土偶です。これも完形です。上半身だけです。ただここに穴が開いているので、もしかしたら首を取り付けるようになっていたのかもしれませんが、乳房があって、腰までのものです。この土偶が発掘調査報告書に最初に載せられた時には、上下逆の状態でした。首から腰にかけてのものと腰が広がるものと最初は考えていましたが、乳房の付け方を見るとこちらではなくて、こうだろうということになりました。それから、これらは花輪台遺跡のもので、草創期の撚糸紋土器の時期のもので、小さくてもこのように完形のものがあります。

早期になると、このようなものがあります。これもやはり土偶なのです。胸は表現されてないですが、模様があります。こちらは、バイオリン形に近いものです。この所がずっと首が出ているようなものはバイオリン形と呼ばれています。千葉県の中鹿子遺跡、茨城県の二本松遺跡のもので、

前期になると、もう少し表現が豊かになります。だいたい板状のものですが、地方色がみられるようになって、やや大型化していきます。また、このように十字形になってくるものもあります。いずれも胸の表現があり、これなどもお腹の出っ張りも表現されています。

縄紋時代の人は、土偶1つをとって見ても、非常に抽象的なイメージで物を作ります。後で出て来る後期の山形土偶は非常にリアルなものです、それ以外のものというのは遮光器土偶をはじめ非常に抽象的な造形をしています。

中期になると、出土数が増加してきます。それとともに、土偶の形も形態的にも多様化してきます。これは東北地方の土偶で、両手を広げている十字形の板状土偶がつくられ、顔の表現もされるようになって来ます。粘土の粒などを貼り付けて作っています。この上の方のものは三内丸山遺跡の土偶です。これは三内丸山のシンボルみたいになっています。

同じく中期で、これは先程出てきました縄紋のビーナスですが、こちらも国宝です。5個目の国宝です。こちらは縄紋のビーナスで、こちらは縄紋の女神とよばれます。山形県の西ノ前遺跡の非常にすら一っとした背の高い土偶です。共通点を見つけるとすればお尻です。中期の代表的なものです。

これらも中期の土偶ですが、手を十字に広げていて、顔もしっかりと付いています。立つことのできる土偶でもあります。これは長野県、それから東京都で出土している土偶です。

先程のビーナスの顔もそうですが、普通に作ったこのような顔と違ってこの土偶の顔は動物を連想させるような顔をしています。これはこれで人の顔の表現です。

そして、後期になると、先程のハート形土偶、これは筒型土偶、これは先程の仮面の女神です。この後期になると、これまでほとんど土偶が出て来なかった西日本にも土偶が見られるようになって来ます。これは茨城県の小屋ノ内遺跡のものです。

これも、同じく後期の土偶ですが、これは山形土偶、後期後半のミミズク土偶です。先程表現がリアルだと言いましたが、お腹も膨らんでいて妊娠した女性の姿をよく表現しています。それが、どうしてこのようになってしまうのか(笑)、変わってしまうのか、縄紋時代の人たちの意識が。これらは関東地方で出土した土偶です。時期が違うとこんなにも造形が変わってしまうのです。

これも先程出て来た、しゃがむのと、この中に国宝が2つありますが。後期後半から後期の末にかけてのものです。

そして、晩期の土偶と言うと、東北地方の亀ヶ岡文化の中の遮光器土偶が代表するものとなっています。遮光器土偶自体は、顔の表現が眼鏡をかけたような表現です。これがイヌイット達の雪の照り返しよけにする眼鏡に似ているので遮光器土偶という名前が付けられています。遮光器土偶のもう一つの特徴は、頭の表現です。王冠を付けたような装飾があります。胸部の模様は、先程も言いましたが、亀ヶ岡式土器の各期の紋様が施されているので、その紋様を見ることで、土器の変化と対応した土偶の変化が追えます。これは、前回お話ししました2億円で落札されて、おそらく国外に行ってしまった土偶です。晩期前半頃の土偶です。典型的な遮光器土偶というものですが、先程出てきました亀ヶ岡の土偶です。頭の上の方の表現、目の表現、乳房の表現、腰が張っている女性特有の表現です。

私の子どもが小さい頃、ドラえものの映画、確か「日本誕生」という題でやっていました。その中に、遮光器土偶が出てきます。これがドラえもんに対抗する悪い神様の代表で出てきました。最後やっつけられますが(笑)、それで、遮光器土偶が「怖いもの」とイメージされたこともあったのではないかと心配をしました。

晩期の前半から半ばにかけて、この遮光器土偶の特有の目の表現が終わっていきます。晩期の後半から終わりの頃になると、この腰の張った足をちゃんと踏まえた立体的な有脚土偶になっていきます。頭の模様と胸部の模様は晩期の後半から終末期の土器の模様と、ほとんど同じ部類になります。

この後、写真はありませんが、特に関東地方の一部で容器形土偶と呼ばれるような中空の体内に子どもの骨が収められているような土偶も見つかっています。土偶の意味の1つはそのようなところから考えることができるのかなと思います。

ざっと本当に荒っぽい変遷でしたが、以上です。

今日は、これで終わりになります。どうもありがとうございました。

司会：はい，お時間となりましたので。全15回，今日で最終日の館長講座となりました。みなさん，最後までお付き合い頂きまして，ありがとうございました。